

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	創作行為を媒介とした言語と身体の変動とその教育的含意 SPAC 俳優による演劇ワークショップをとおして				
研究組織	代表者	所属・職名	言語コミュニケーション研究センター・特任講師	氏名	小田 透
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	言語コミュニケーション研究センター・特任講師	氏名	小田 透

講演題目	SPAC 俳優との身体と言語のワークショップから見てきたもの
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>研究の目的：母国語であれ外国語であれ、感情豊かなコミュニケーションのためには、狭義の語学力だけでは不十分であり、発声技術や身体技法のような表現力が必要になってくる。しかしながら、まさにそのような非言語的な表現力こそ、本学の学生に大きく欠けているものでもある。本研究は、外国語学習に応用できるような声と体の運用法の構築を念頭に置きつつ、まずは、その基礎となる母国語の言語感覚や身体感覚を研ぎ澄ます訓練方法の案出を目的とした。そのための手がかりとして、SPAC（静岡県舞台芸術センター）の協力のもと、演劇訓練の手法を取り入れたワークショップの開催を目指した。</p> <p>研究の成果：SPAC 俳優の布施安寿香氏を講師として招聘し、学生、教職員、県民を対象とした対面のワークショップ「日常生活のための演劇ワークショップー身体と言葉のポテンシャル」を2月中旬に2回、3月初頭に2回、計4回開催した。参加人数は延べ45名（実人数27）に上り、その年齢層は10代から60代まで幅広かった。2回ごとに実施したアンケートの集計結果（総回答数24、回答率77%）によれば、ほぼ9割（回答数21）が、自分の言葉や身体にたいする意識が変わったと感じていた。</p> <p>ワークショップは平日（木・金）の夜、静岡県立大学（18時30分から20時の90分）と静岡芸術劇場（19時から21時の120分）の2か所それぞれで、身体運用にフォーカスしたものと、呼吸や発声にフォーカスした2種類のワークショップを開催した。参加者は演劇的なトレーニングをとおして、普段ではあえて意識することのないものー自身の所作や呼吸、朗誦のスピードやボリュームーをあらためて意識するとともに、他の参加者との共同作業ー絵画や彫刻に描かれた身体をトレースして、伝言ゲーム的に表現しあったり、頭のなかでふくらませたイメージを単語一つの言い方だけで相手に伝えたりーをつうじて、日常生活に活かしていけるような技術や感覚を養うことができた。</p> <p>今後の展望：「今後生きていくうえでの見方が変わるかもしれない」、「日常がとても新鮮に感じられるようになった」というコメントを参加者からいただいた。このようなワークショップが社会全体に与える影響は数の上ではごく小さなものかもしれないが、それを体験した人々には、きわめてラディカルな質的な変容をもたらすことができるのではないだろうか。そのような契機を作り出す可能性を今後も探求していくとともに、本学における英語教育に本ワークショップで得られた知見を取り入れていきたい。</p>